The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 313. APRIL 16th. 1892.

EDITORIAL:—In Pursuit of Spring. (No. 4.)

MISCELLANEOUS:—On Reading "Rōshi." (No. 2.) (Tenchishi.) The Home that used to be Mrs. Brownings the Poetess. (Miss. Summercet's Manual.)

BIOGRAPHY:—The Brief Biography of the late Mrs. Sen. Tsuji.

NOVEL:—"Kurozukin." (No. 3.) (Jiuhachikōshi.)

THE FRIEND OF THE ORPHANS:—

CONCERING WOMEN:—

NEWS OF THE WEEK:—

第三百十三號目次

●迎春行

●雜錄　老子を讀む(下)(天知子)○詩人ブローニング女史の故家(サマーセット女史手記)

●史傳　故辻夫人せん子小傳

●小說　黑頭巾(第三回)(十八公子)

●孤兒之友

●女報　さまゞゝ

●物價

巖本善治編

吾黨之女子教育

小形二百十七ページ
定價郵便共金拾錢

「吾黨の女子教育」成る。巖本善治君の演述又は起草に係るものを編せしものにして、本校教育の精神、期圖、大率ね之に同じく、現今實施する所ろ亦之に異なるとなければ、此書亦用ひて「吾校の女子教育」を代言するものと謂つべし。故に、君と計、吾校之を版にして、世の同志に示すとす。

全篇十五章

明治女學校生徒に告ぐ……一
目下の女子教育法……一
何をか中正の旨義と云ふ……三
女子教育に關する幾多の謬見……三十
女學及女子教育……五十四
母妻論……六十四
女學に反對する者の言論……八十四
日本女學讀本の編纂……九十二
女禮と躰操……百
上躰操……百
下女禮……百五
女學校の裁縫科……百十二
塾舍に三の法あり……百二十二
武道の辨……百二十七
老母に代つて女學生へ苦情……百五十
細君內助の辨……百五十九
當今女子教育者の胸臆……百九十七
女學普及の經綸……二百〇七

發兌元　明治女學校

發賣元　東京下六番町六番地　女學雜誌社

女學雜誌　第三百十三號　明治二十五年四月十六日發兌

迎春行

（十九）先覺と後覺

兵庫縣師範校長と談ぜしとき、聞けるに、攝津和泉出身の書生は、小利口にして才はじけたれば、久しきに續かず、兎角に折れ易し、丹波の山國より出でたるは、不器用にして朴直あれば、苦學刻骨して遂に大成するもの多し。特に、篠山の如きは、舊藩主の監督の下に鳳鳴義塾なるものあり、旨と軍人養成に力を盡し、一藩の氣風尙武の頂に達し、幼兒も、唱歌に耳を塞ぎて、躰操に勇み立つの躰爲なり、此等の影響にや、師範校に入れる書生も、毎年、一二三の上席を占むるものは大抵、丹波の人にて、今年卒業せし二十五人のうち、九人は即はち此國の人（篠山、四人。栢原五人）なりとぞ。夫れ、人才の養成は、國の寶を掘出すにひとしく、亦た東洋に浮べる此一小國の礎を万古に堅くするに同じ。而して、後生の發達何如んは、驚ろくべきほどの關係をもつて、先輩の言動何如に源づく。余れ、校長の談によりて、篠山と、郷里、但馬出石とを比較し、感慨に堪へざるもの多し。出石、加藤弘之君、櫻井勉君、の類を出せり、而して、目下人才輩出の途必らずしも隆々たらざるものは、蓋し見る可らざるの弊元其骨髓に存するが故なり。

（二十）少年會

但馬の國傳道の途久しく塞がれたるに、二年前、神戸にある少年會と云ふもの、感ずべき熱心を以て之に着手し、今や着々として其功を奏す。そも〳〵、少年會とは、當才の緑兒より、十五才の少年に至る迄を會員とし、緑兒は、母の儉約により、幼兒は、其小遣ひにより、少年は毎土曜日の仕事により、月二錢三錢の資本を蓄はへ、且つ有志贊成の人に少年自から遊說し、外國人の方々よりも少なからぬ裨助を得て、一月凡そ、十七八圓の金を得、これを以て、但馬の國出石に自給傳道師を派遣せり。今は、わが家族の如き湯谷君の知人にて、久保荘三郎氏と云へる人、之が傳道師となりて吾が愛すべき郷里に道を傳へ、二年の辛苦功を奏し、今やすでに結果を獲たり。われ、神戸に到りては、此の少年會の諸君に見ゆるを

樂しみとせり。たゞ滯留の時間少かりければ、會員の主なる方々のみぞ、余が宿に集り玉ひける。今ま、其名と年齡とを左に列擧し、看る人の推想を助く、

小林繁 九歲　幹事松田金三 十五歲　幹事川道一也 十五歲
田中久彥 十五歲　茂田つね 十三歲　前幹事小林たけ 十四歲
小林むめ 十二歲

大抵此の類なり。柔よく剛をくぢき、幼兒大率ね大人に敎ゆ、宿弊固結せる吾が故鄕を救はんとするものは、反つて此の如き幼兒の手にてありき。賞むべき哉、贊ゆべき哉。

（廿一）女子の文學

神戶、大坂にて、余に直接忠告せし人二人あり、ともに同一の言を以てせしを見れば、此邊にかゝる說中々行はるゝなるべし。其言に云く、當今の女學生、格外に文學を好み、大抵、文學者を理想とす、而して其感化の本源は女學雜誌に在り、女學雜誌たるもの大ひに此に警戒する所ろなかる可らずと。余れ唯々として聽き之を謝す。后に密かに思ふやう、女性が文學を好むは其本性なり、而してことさら之を開發し、寧しろ之を偏長せしめたるは、獨り女學雜誌の力にはあらず、今の女學校の科程なるものも亦大ひに與かり力あるものならんと。左れど、此の因果の硏窮は暫らく置き、女性と文學との事、果して此まゝに進ましむべきや何如んと問ふ。夫れ、文學を好むによりて、家政實際の務を輕んずるものあらば、そは怪しからぬとなり。女性の文學を愛するは、當にセヲヂ、エリヲットの如くなるべし、彼女、稗史小說を著はして一世を聳動するの傍ら、女子にして家內の仕事を輕んずるものを大ひに卑しみ、躬行實踐して此弊を破らんとしたり。故に、文學を好むの故によりて、育兒、看病、家政修理などの事を忽諸にする女學生ならば、余はくれ〴〵も之が悔心を促がすべし。然れども、文學は、女子の職として極めて適當且つは極めて有効なる所以の理を之が爲に忘却すると能はず。ことに、日本近代の如き、女性改革の維新草創の時世に於ては、女子が其の見識を發表し、其の鬱勃たる思想、もしくは高潔聖純なる理想を廣告するの手段、文に倚るの穩當且つ有益なるに若くものあらず。故に、余は此の主旨を以て、今の婦人間の率先者に文學を奬勵するもあり。然れども、文は方便にして目的にあらず、たゞ道を載せて人の心中に入るゝの事た

るに過ぎざるなり、文に巧みなりと云へども、思想道念を涵養するにあらずば、果して之を何ものにか利用すべき。故に余は、文を奬勵すると共に、道德及び學術を大ひに奬勵するとの必要を覺悟す。たゞ夫れ、ビネーの言深く味はふべし、云く、天の眞理を示すや之を美の形に於てす、人の眞理を發顯せんとするも亦此の則に據らずんばある可らず、美妙ならぬ姿にして眞理を世に紹介するは、眞理に對して無禮たる也と。余は、此の主旨を以て、文を重んず、ことに美の保護者たる女性なるものゝ爲に、其文に重きを置く。見よ、不德の文華翩々として日本の空中を輕く舞ふ、濁塵と、惡氣滿つ。この際、天のインスピレーションに動き、人情の微妙に感激し、純潔深愛の文章を世に示すを得るものは、果して誰ぞや。余は、婦人が庖厨を出で、針縫を搔ひ遣るを好まず、たゞ庖厨針室の內、あに千古の妙文章を草すると能はざらんや。今の日本婦人に尤とも行ひ易き事業は即はち此也。

(廿二) 婦人傳道者

關西に來りて、先づ注目すべきものゝ一は、女子傳道者の制度、遙かに關東に優るの事なり、神戶に、女子傳道學校あり、アメリカン、ボールドと、ウーマンス、ボールドとの協同事業にして、著名秀逸なる女宣敎師ミス、ダズレーの管理の下に立つ。女史、日本に在るは十八年、攝州三田に最初傳道したる、異日廢刀論の主唱者を此の一小藩より起らしめたる、今の神戶大坂に無數の三田出身の信徒あらしめたるなど、女史の力によるものを多しとす。其校の學生は三年在學し、每年半期學び、半期實地傳道に從事す、此校卒業の女傳道者は、四國九州丹波但馬の邊に働らくもの多し、今年卒業したる八人は、高松、大坂、岡山、松山、神戶、越後などに分れて行く、而して其の働らきは、成べく目に立ぬ下側の所ろに於てし、會の男牧師に助けするにありとぞ。知人、某女史、豪放活達にして、少しく婦人の謙德にあき足らぬ所ろありしが、一年前、此傳道學校に來りて敎え且つ學び、朝夕、ダズレー女敎師に接して、靈性一變したりとて、切りに余が爲にこの女敎師の德を語らる、余れ亦之に接見して其感なきにあらず、深く道の爲に謝すべきもの也。今茲、組合敎會の年會に、傳道會社に女子部を置くとの一案あり。そは、ダズレー女敎師年來の企望にして、遠からず其計畫燦然として人目の表に現

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

はるゝとならんが、今に於て早く業々しく發表し、而も、男子の力を假りて行はんとは、其の好みせざる所ろなりと聞しに、今や傳道會社男子の方々の手に於て既に公然其計畫の發表わらんとせしなり。會議の樣子如何あらんと注目せしに、滿塲惣起立にて、かゝる計畫の成立んとを贊成すると同時に、之に男子の手もて關はることを可とせず、遠からず、婦人方の着手を待ち、之に一任し、且つ成立せし上は、傳道會社と相應の關係を爲さんと云ふにてありき。一躰の人氣、女子の傳道と云ふとを重んずるが如く見ゆ。牧師傳道師の妻に、女學校出身の人多きと關東にまさる、西洋女宣敎師の日本語に巧みなると關東にまさる、直接傳道に從事する日本婦人の數關東にまさる、之を優待し之が必要を感ずるの人氣また關東にまさる。關西に來るものは、此の一事に注意せざらんと欲すとも得じ。

（廿三）西洋人

神戸英和女學校長ブラチン女史の名を聞くや久し、女史亦た日本人の說を聞くとを樂しみ、不肖余が如きものゝ答を要むると數ばなりき。其學校休業中なりしが、余が神戸に下るを待ち外に出でずしてありき。一面舊識の如し。神戸より大坂に還るとき、滊車中、ともに下等室に入る、余いたく掛念して心づかひせり、同室の人喫煙し、悪臭紛々として鼻の邊りに來るときは、一層堪へがたく思ひき。然るに、女史は云ふ、常に下等室に乘ず。いさゝか學生に助けするの資をつくるなりと。本邦女學の爲に感謝せざる可らず。車中、密やかに女學の事を談ず、其の人の說を聽かんとするに熱心なる外國婦人中に多く見ざる所ろのもの也。つねに歎ず、余の如きは頑骨曲げがたく、且つ初來の志望一朝にして動かす可らず、到底外來の客と共に事業を擔ふと能はじ、然れども、もし眞實にして卓識ある日本人にして能く彼れ諸君と共に事に從ふとを得ば、諸君深衷の誠意、實際に功を奏するとを得ん、たゞ眞善なる日本人諸君に伴ふとなく、不幸にして、短才輕薄の人多く之に會す、ゆえに諸君が海を渡り、友を離れ、身を獻げて異邦の民の爲に誠意誠心をもて爲す所ろの事業反つて往々にして正鵠に外るゝとあり、悲しまざる可けんや。余れ大坂一致女學校に行、城北の村端、掛はなれたる最とさびしき校舍に、數至つて少なく、室房多く空なる塾舍に接し、わづかに二房

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

を家として、唯一人住ひせる年若き西洋女敎師某を見る。温厚にして愼しみ深く、頰を紅らめて打恥ぢ玉ふ景色、宛然わが同胞二八の佳人の如し。而して此の妙齡の佳人は、遠く父母の鄕を離れ、孤身此の片田舍に獨居して女學に從事するなり、好意何ものをもてか謝せん。あゝ、同胞。外國宣敎師諸君が事業の結果をもて、其の人品を評することなかれ。余は、其誠意博愛を感謝するの念とゞめがたく、時としては密かに心中に泣きぬ。余が外國人に對するや、時ありては處女の如し。

(廿四) 大坂城

布哇國の牧師岡部二郎氏は、知人なり、相伴つて一日大坂城を觀る。食人の鄕一變し、十五年間に、基督敎主義の政治を打建たる蕞爾たる一小島は蓋し万古に生存すべし、此城當年の主人今は何處にありや。岡部君、切りに布哇島の將來を論ずるに連れて、余は無上の感慨に溢れぬ。落日すでに、山の端に近く、河より登る淺霧、都を覆ふて、自づとかすむ。闇中の帝子今ま何くんか在る、檻外の長江空しく自から流る、百年同じく謝す西山の日、千秋万古北邙の塵。試に聲を放つて吟ずれば、門外の番卒、頭を擧げて不審し氣に見る。右府果して自刄せるか、もしくは薩洲に入りたる乎、亡命の寒士六万人屍を列して死しつるか、もしくは舟を浮べて西南に走りたる乎、木村重成、頭髮に馥郁の香りをこめ、一樹のかげ、一河の流、終生の緣しを無限の文にのこして、城外馬上に戰死したる乎、淀君甲を擐き馬に跨がり娘子軍を率ひて時ならぬ櫻花を血混々たるうちに散らせしや何如に。往事、すべて知る可らず。只だ知る所ろのものは、豐公の遺孽遂に天下を失へりしと是のみ。千重の城敵を防ぐに足らず、東洋万古の奇傑二世にして其種を絕つ。功名富貴とし長へに在らば、漢水も亦た西北に流るべし。

(廿五) 耕讀園

思はずも、日を大坂に重ね、計らざる人々に會見せり。いでや、打立ちて定めたる旅に進まんと思ふうち、中々に爲すべき事澤にて、端なくも四月三日、紀元節と安息日とを兼ねたるいと祝すべき日とはなりぬ。世の常の客舍にはあらねど、こゝにて安息日を過さんとの殘り惜しく、友人、阿波松之助君が耕讀園にゆく。大坂に來りては、此家に宿らん定めなりし

が、事ありて果さず。今日は別れにとて來り、其温かなる室家の內に入る。余は旅袋より家族の寫眞を取出でゝ示す。一巡に了りて亦た此處に來らん日にこそ之を呈すべけれ、其日までは常に携さへざる可らず、たゞ之に換ゆるが爲め豫じめ君が室家の寫眞を請けんとて、一葉を受く。實に、樂しきはホームの畵あり。或人の句に、世に寫しがたき景色一つあり、ラハイロも、アンゼロも、之を刻むヿ能はず、亦之を畵くヿ能はず、そは母、子を抱くの圖なりと。されど、寫眞は、その一分を現はすに足らんか。此家の主人、むかし、學農社にて共に農業を學ぶ。今や、君、實際に耕やし且つ讀み、余は當初の志を遂ぐるヿ能はず。もとより今の天職を憾むヿにあらねど、一心の嗜む所ろを云はゞ、即はち依然昔日の耕讀園に入らんヿを欲す。

（廿六）湊河

かの兵庫は、滊車にて一走し去る。友人が貸したる望遠鏡にて打ながむれど、定かには見る可らず。耕讀園主人と打語りたるヿを思ひ出で、當年の理想南園の諸葛公をそゞろに連想し、日本武士の花、楠公の爲に、放翁が句を朗吟す、

五丈源頭秋色新。當時許國欲忘身。長安之西過万里。
北斗以南惟一人。往事已如遼海鶴。餘年空羨葛天民。
腰間白羽凋零盡。却照清溪整角巾。

舞子の濱に安息す。淡路島眼前に横はる手を以て招くべし、須磨、明石、岸を交へて接す、近く望むべし。人丸が遠波に征く船を惜しみ、直實が馬上に北ぐる敵を追驅たる、皆な此のあたりと聞ゆ。明石の姫が琴の音のそゞろにて、光源氏が磯邊の遊びを根なし事と思ふ可らず。万葉の歌人が歌に、大丈夫は御獵にたゝし、姫たちは、貝ひろはんとて赤裳すそひくとあるは、實に此の邊り、青松、白砂に映ずるの濱にはあらずや。日沒してよりは、前面の島、黒うなりて、一幅の墨畵を引き、行通ふ波、光を殘して、いよ〳〵白し、燦然たる燈明の台、島の前岸に屹立し、船人に方向を示して、家に迎ふる多恨の人を慰さむ。未だ千鳥の鳴音を聞かねど、細波、磯の足を洗ふて何やらんひそめく。時あつて轟然一走する滊車の外は、四面沈として聲なし。而も、車の轟ろきたるのちは、尙更にさびし。梢にむせぶ空の音は、平家末期の英雄の恨みか、白砂、血痕をとゞめずして、流轉生死の數眞砂より

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

も多し。あゝ、平氏、たまく雲上にたゞよひて、武人の骨を軟らめ、榮華二代につゞかずして、北方の暴夫に花の都を追立らる。牛、車を引かず、馬のあがき遲し。鎧の袖に歌袋をつけ、太刀のわきに笛を挿はさむ。之を金殿玉樓の內に用ひずして、陣頭馬前に其の失んとを恐る。われ今夜客舍の樓に凭りて、坐ろに其上の成敗を考ふれば、月、老松の上にかかりて、露の涙を落す、

くれ竹の青葉の笛の音はたえて
むかしながらの松風の聲

(廿七) 源平盛衰

後の太政入道、尙ほ權大納言たる時、西光、既に上皇に進言して曰ふ、驕りて禮なき者は天の惡む所ろ、平氏夫れ亡びんかと。當年すでに斯の如し、然るに、放肆暴慢なる此の我儘老仁、無學無識の勇氣を以て、輦下に勝手至極の處行を爲す、一門にして公卿たるもの十六人、殿上人たる者三十餘人、天下の半ばを領し、同族以外を人に非ずとなす。彼が驕慢察すべき也。此に於てか、源氏の冑、滿天下不平の潮に乘りて軍を出す。其の旗を石橋山に上るや、起誓の文一章を作りて八幡宮に納む。己れ嘗て鎌倉の祠に之を見るに、文中の要旨に云ふ、願はくは奢る平家を討たしめ玉へ、戰提つて吾等亦た奢らば、神明昭々立どころに之を罰し玉へと。左れば、當年彼が好題目として取つて標章したる警語は、驕奢の字にてありき。是れ宛がら、硬派、民力休養などの文字の如し、恰かも好く民望に中す。况んや、此の蛭子島の野の虎は、狡猾老練なる北條父子を傍に置き、經綸非凡なる大江參謀を帷幄の內に蓄なふ。加之、匹夫の將、義經は卒に先だつて戰ひ、學びざる豪傑義仲は項羽となりて先づ洛中に入らんとを欲す。宗盛、維盛の徒を奉戴すべき京地の人形武士が、一日にして早徨、都を落ち、平氏の餘命數月にして絕たるは、當然の數なりとす。凡そ、輦轂の下に覇府を開く者は、實力を備えずして、至尊の擁護にのみ念ひを掛く、この故に、大勢一變すれば、其亡ぶるとの早き、手の裏を反すが如し。鎌倉政府能く殷鑑に省みると云ふべし。大政入道、無學にして長計を知らず、宮室に縁附するとを慮ばかりて、大勢を利用するとを思はず、たまく福原遷都の策を畫すと云へども、輕率にして遂に大成するとなし。重盛に至つては、千古の君子なり、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

德望百世の師となるとを得、何を以てその族に私しするの策を立んや、如此くして、平家亡ぶ。平家亡びてより、帝室と覇府と長久に別離せり、將軍の一盛一衰は、帝室を動かし奉つるの大不敵を爲すはなし。願はくは、今の明治政府も、源氏たらん、其内閣は責任内閣たらん。

(廿八) 文明、風景を殺す

前つ年、余が、故郷に歸る旅中の慰さめは、途に須磨、明石を過ぎ、其の白砂青松相映ずるの光景を觀るとの樂しみにてありき。後ち、山陽鐵道の企業を聞き、其線路を案じ、文明の器械、寧ろ風流を毀つとなきやと憂ひたり。夫れ、風流は一の文明なり、開化の故によりて濫りに之を傷つく可らざるなり。維新後數年、心なきはやり男、切りに城を毀ち、老樹を覆がへし、庭園に茶を植えたり。文明國に安息日あるとを知らず、英雄の心に閑日月あるとを思はざるものは、營々として速かに死するを當然とす。嘗て、東都忍ばずの池の畔に馬乘塲を造るとき、之に反對したる論士いと〳〵稀なりき。如此くにして亦た此の須磨、明石の風流を殺すとに掛念するもの少かりしと思ふ。今ま來りて之を觀れば、鐵路、松林を横斷し、黑煙、白砂を汚がし、景を損せしと少なからず。ああ、癇癖短氣の二郎、城門に笛の音を聞きては縉紳の風流を歎じ、曲辨佞巧の平三も、梅花を折りて箙に揷はさむの餘地は存するものを、明治文明の物知り人は、何如にして斯く風流に情け薄きや。

(廿九) 近き者は遠し

京に田舍あり。神戸に隣りたる兵庫の進步緩漫なるは驚ろくべし。播州なる、明石、姬路の邊りの時世に後れたるも亦た不可思議なりとす。凡そ、進步の地に近き地方は進步遲し。そは其地方有爲の人、皆な進步の地に出でゆきて其鄕に止まらざるに由るなるべし。此の故に、今日の旅客たる余も亦た明石、姬路に足をとゞめず、其の非凡なる二つの城跡を遙かに望見して、播州學事の將來の京たらんと信ずる龍野の町に二夜を過す。

(三十) 博愛社

龍野を距る二里、瓜生の矢野村と云へる所ろに、彼の小橋勝之介君が博愛社あり。余は尋常ならぬ心を以て、さま〴〵の想像を畫きつゝ、喜び勇みて彼處に向ふ。途に、端正莊和の

一少年、脚半を穿ち、裳を搔げ、手車を引きて來るに會ふ。書生の如くにして、商人の態あり、商人の如くにして書生の風あり。博愛社迄でとて余を送られたる龍野孤育塲の主人、見て云く、これ小橋君の弟なりと。余、車を下りて暫らく立談す。あゝ此の多望ある好少年の亦た孤兒の爲に、商人となり、農夫となり、下僕となれるなり。社は、小橋君が舊家にして、結搆、村中の第一たり。社中、今ま一人の女性を見ず、孤兒炊煮万端を掌さどる。孤育塲主人去たるのち、凡そ半日、此の初對面の友、數年未見の友、一見舊識の友と打語らふ。或は、靈性上の經驗を談じ、或は、孤兒院將來の事を議る。君が病甚はだ重し、身から今后數年の短命を期して、而も計畫遠大、近く北海道に一遊を試みんと欲す。云く、何日迄で生存らふべきかは、悉とく天父の許に由ると。實に、然り。左れど祈禱は天父の聽き玉ふ者なるが故に、余は其の長生を謹しんで祈禱せざる可らず。

（卅一）非文人

龍野孤育塲の主人富井定助氏の許に一宿せるとき、余に何ものか書けと迫る。余は謂云る文人墨客に非ず、紙に臨みて吟詠を書い付け、款を落して文想を后に誇るが如き技量毫末もあらずとて辭す。左れど、孤育の事業に感ずる所ろ多ければ尋常の詩歌山水にあらぬものを認ためんとて、左の一文を書いたりける、

難めども痛まず、爲ん方盡れども望を失はず、天を敬し人を愛し吾良心を發揮すれば、夕に死すとも長久に生くる也。

余は博愛社を辭して、其門を出るとき、自ら記したる此の文の事を切に想起したり。

（卅二）有年の凶荒

博愛社の孤兒二人、余を送りて二里を隔つる有年の停車塲に來る。われ、之に堪ゆると能はず、中途に辭して還らしめ、田圃の一老農を傭ひ、荷を負ふて隨はしむ。余が足や、早し、彼れ常に趨りて隨ふ。彼れ后より言ふやう、旦那の如き步るき方にては一日に十里も容易きとなりと。其聲ふるひて細く且つ何如にもおかし氣なる調子なれば、余は顧みて一笑し、つら／＼彼を熟視するに、顏靑ざめて膨れ、步みとぼ／＼として病めるもの丶如し。余は問ふ、汝は病めるかと。彼重々しく微笑し否と答ふ。然らば、何才なりやと問ふに、五十な

りと答ふ。齡未だ老ひしにあらず、身亦た恙がなしと云ひて而も斯の如く衰ろへたるは何ぞや。余は慣れさに堪へず、之より樣々の問を起す。云く、汝が村の若いものは道樂を爲す乎と、彼曰く、道樂をするとも何も出來ますものぞい、食ふとすら十分に出來ませぬものをと。問ふ、芝居は何如ん。云く、芝居は大好にて、村中以前は流行たれど、今は芝居どころで御座いませんと。答ふ、汝は子なきや。云く、男の子計り三人あり、皆な血氣です。然らば、汝は甚はだ幸福ならずやと問ふに、云く、二人あつても、三人あつても、彌よ貧乏する計りでサア、今の若いものは可愛相です、遊ぶとも出來ませぬ、私等が若い時は遊んで計り居りましたが、今の若いものは、六つ七つから早や仕事計し爲ねば成ませぬと。問ふ、然れど、樂みなかる可らず、何事が尤とも樂しきや。彼れ悲しげに答ふらく、マア、百性でサア。余れ驚ろきて問ふ、然らば、汝は何程の耕作を爲す。彼答ふ、親子四人で二反丈け作りますと。然らば、其にて足る可らず、何ゆへ更に多く作らざるや、亦た力余るべし、何事を爲すやと問ふ。彼答ふ、餘計作りたけれど、地面を借りれば小作を出さねばならず、別にもうかりませぬ、小供等は山の木を伐つて賣出しますがもうけは眞に僅かなものですと。斯て近年車力の便開けてより、山の樹を伐りて賣出すと盛んに行れ、全山殆んど樹なきに至らんとするとを告げ、且つ、幼時以來聞しとなき大水、近年每度此邊の田畠を流し、恐ろしいと計りですと半ば泣きて語る。あゝ此の半死半衰の一農夫は、滊車の開通が物價の上に影響するの理を辨まへず、山林の濫伐が洪水干魃の大害を來す所以を知らず、坐して、天來人爲の損害を蒙むり、豫じめ之を避くるの途を悟らず。たとへば、三才の童兒、辛うじて步み噴火山口に近づくが如し。正直に謹勉し、正直に勞働するとを止めざるとき、因果當然の理法嚴乎として其頭上に落下す。あゝ、有年の地、年あらず、貧農歲々に增加す。而して、如此きは啻に此の一地方のみの事にあらざる也。經世に志しあるもの焉くんぞ坐視するに忍びん。

（卅三）君子の儒

岡山に來れるは、芳烈公仁化の遺風を觀、且つ石井君孤兒院の實況を目擊せんとてなり。途中、彼の閑谷校を覽るとを得ざりしは、大ひなる遺憾とす。夫れ、岡山は、新太郎少將の

城地なり、熊澤蕃山、津田永忠の功を立たる地なり、岡山學校ありたるの地なり、現に後樂園、及び孤兒院あるの地なり。旅客當に必らず杖を引くべし。想ふ昔し芳烈公の治政に熱心なる、今人をして景慕に堪へざらしむ。公八歳にして封を襲ぎ、や、長ずるに及びて毎夜寐ねず、侍臣之を問ひ奉つるに應へず、久しく斯の如くなりけるに、后翻然此事急に止みたるを以て、重ねて問ふに、公の曰く、予れ幼にして父祖の大國を領す、念ふに何を爲して國民を敎養するを得んと、晝思ひ夜慮り思を焦し意を刻み食ひて味ひなく寢ねて席を安んぜず、唯だ論語を讀みて、始めて、君子の儒となり以て國民を敎養するに足るを悟り、然る后ち心定まり始めて熟眠することを得たりと。時に年十四。嘗て京の所司代板倉勝重を見て國を治むるの法を問ふ、勝重固辭し、后やうやく答ふらく、民を治むるは寛を以てす、譬へば猶ほ方盆に豉を貯はへ、圓き杓を以て之を平らにするが如しと。公聞き久しくして曰く、四隅餘りあるを何如んと。勝重曰く、老夫、多く智謀の士を見たれど、未だ曾て少年にして思を經世に潛むる君が如き者を見ず、因て意ふに、君の明敏必らず四隅整飾し、棋を列べ、野を畫きたらんが如きを欲するならん、されど國を治むるは寛を以てすることを望む、然らざれば、民服せざる也と。此公、遂に、伯繼、永忠の二人を重用して、水を利し、山を整のへ、學校を開き、稼穡を勸め、井田を試み、倉廩を開き、風俗を正し、文武を隆んにす、實に君子の儒、儒者の治政なりき。德川氏三百年天下略ぼ平らかなり、各藩一小天地を畫し、儒敎すでに深く浸潤す、眞にこれ道德的政治を試驗するの好方便に富みたりき。水戸に義公あり、江戸に樂翁公あり、而して岡山は芳烈公を見る。皆是れ君子の政治家。政治と道德との調和を極めて美はしく證明したり。皆是れ純然たる武士の好標本。東洋に於ける、ゼントルマンの風采德性亦千古の景慕を惹くに足らん。

(卅四) 王陽明

元和、寛永の頃ろ、近江に中江藤樹先生ありてより此の方、大坂に、大塩平八郎あり、岡山に熊澤蕃山あり、爾來、王陽明の學派は專ぱら西方に流行し、周防岩國に於て、朱子派と大衝突を爲すに至りぬ。維新前、岡山以西、四國九州に王陽明派の學士多し、余はこれより其領内に入らんと欲し、こゝ

に先づ、蕃山の事業を遺し、山田方谷の學舍を遺したる地に到着す、もし夫れ仔細に討窮し來れば、陽明、朱子、遂に大徑庭あるヿなし、二先覺、當年に於て既に相近づきたるなり、然れども、其傾向を察すれば、互ひに隔離せんとする所ろ尠からず。一は、文學に耽り、他は實行に偏し、一は守舊に安んじ、他は創業に急ぐの趣むきあり。此故に、學者その氣質によりて、入門の方向を分つ、謹直の人先づ朱子より入る、而してのち陽明に轉ず、豪快の人先づ陽明より入る、而してのち朱子に轉ず、たとひ轉ぜずとも、其偏弊を拔いて其婉美を盡すときは、二派互ひに異なるヿなし、純然たる君子 英雄を得るなり。たゞ夫れ現今の學弊は、寧しろ朱子的の傾向に多くして、陽明的の傾向に薄きにあり。

（卅五）自由及び鍛練

これ岡山英和女學校の書生、及び岡山婦人矯風會の會員に對して演述するとき、坐ろに芳烈公及び蕃山の事を思ふて、當今の流弊に慨歎せざるヿを得ざりき。思ふに、立憲政體は、神を信ずる國民に適するの政體なり、天に敬畏すべき上帝あるヿを確信し、而して后ち其下に四民平等に立つヿを覺悟し初めて其弊を見ず。然るに、未だ天地間の偉大なるものを認めずして而して早く四民同等の格、自主自由の權を主張す、如此き時世には、亂離紛雜の事多く、整然一和したる長久の大計策を立つるヿ能はざるもの也。不滿足なる國會制度は、聰慧なる君主獨裁、及び賢良なる豪傑政治に及ばざるヿ遠し。今の曉々紛々を思ふて、昔日の芳烈公の治政を慕はずんばあらず。又た、今の學者は、聞くヿ多くして、思ふヿ少なし、思ふヿ多くして、行ふヿ少なし、行ふヿ多くして、養なふヿ少なし。其學問は、書籍上の偶像禮拜に過ぎず、其講究は、智識上の雷同附和に過ぎず、其學校は廣き天地にあらずして、狹き校舍なり。今の外形的學問を見る毎に、昔日の蕃山の自修鍛練を慕はずんばあらず。彼れ心膽を練るヿを旨とし、書を讀まざるヿ三年なりき。方今此の類の味を實知せる學者幾人ありや。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

雜録

老子を讀む（下）

天知子

古來幾十百家の筆を掉ふて老子經に註せし者極めて多く而かも所說紛々たる所以のものは即ち其計る可らざる大思想家たる所以ならずや、老子義綱には修身學なりと論じ、嚴君平及び河上公等は政治學なりと論じ、圖澄と羅什等は整理の學なりと論じ、張嗣、王弼等は人を治むる無爲の學ありと說き、其他王倘、毋丘望、程韶、孫登、劉遺、梁の武帝等數ふるに遑あらず、然れども固よりヘーゲルの言ふたる、古來多くの哲學は總て吾が哲學の一部分たるのみとの語の如く、又老子が道の道とすべきは常の道にあらずと說きたる如く、全く純全哲學にして實に宇宙の哲學なりしなり。

黄帝は早く太古に出で、博學聰明の大偉人たり、然れども堯舜とは全く其性質を異にしたるを以て、終に道家の祖として儒家には喝采あらざりしなり、其遺書は誤傳多しとするも、往々にして驚くべき文字あるを見る、事績固より漠然として捕捉するに苦しむと雖ども老子を產みたるもの、實に此大爺にてありつるなれ、而して老子を孕みしものは實に當時の社會と其天資の品性にてありしなれ。老子は一門弟文子に道を傳へ關尹に道書を殘せしのみにして、傳道に力を注がずと雖ども最も道を扶け世を濟ふの志ありし豪傑の士なりしことは前人既に論ずる所のものあり、而かも後世其學德を慕ひ以て大に世に出たるもの多し、則ち莊周、列子、楊朱、壺丘子林伯昏瞀人、田子方等皆是れを修めたりき、その孔子をして吾老子を見るに其れ龍の如しと嘆ぜしめしものは（好しや實說なりと確定せざるも）以て其人物を察するに足るべく、以て當時達眼の士は早く其偉人物たりしを知りたるなるべし。始め周公旦が亂世調頓の必要より大に禮法を興して天下を敎化するや因習の久しき終に繁文虛禮の大弊害となりて社會を昏倒するに至り端なく老子をして、一大改革の思想を勃興せしめぬ、然るに王は暗く民は眠りて空しく行ふに地なく、煩悶の極終に一大哲理を益々琢磨發作するに至りしなり、其「吾をして介然知るとありて大道を行はしめば唯施すと是れ畏れん、大道は甚だ夷かあるに民は徑を好む、朝庭甚だ除すれば田甚だ蕪れ倉甚だ虛し、文綵を服し利劍を帶び、飲食に厭き

財貨餘りある者是れを盜夸と言ふ非道なるかなと」言ふに至りては其慨世の民黨なるを知るべし。英雄固より多角形なり、種々の方向より論ずる時は夫れ擧るに遑なからんとす、偉人原來說き易からず、此に至て筆の投じて長嘆するのみ。

其文章の如きは極めて古雅にして簡潔深奧なり、凡て古書を讀む者は流讀者の眼を以てすべからず、最も思慮ある眼力を以て紙背に徹するの者ならずんは、能く其趣味の隱奧を知ることを得んや、其趣き恰も聖書を讀むが如く、思想進歩するに從ふて同じ文字を讀むも猶ほ新たなるの感あるものなり、實に古書を讀むは吾が思想を鏡に寫すが若く、彼にあらずして我れにあるのみ。老子の文辭は多くの渾喩と韻語とを用ひたるを以て一層の意味を深からしめたり、例へば渾喩に於ては「有名は萬物の母。」又氣を專らにし柔を致して能く嬰兒ならんか」といふ類是なり、然れども莊子の如く寓言を用ふることなく、去りとて奇語を往々にして用ひたる所あり、見れ亦一世の達文傑字あるかな。

偶に學生多子の爲めに老子經を講じ終らんとするに際し、轉た昔日學窓の下に論難攻擊の思想を同伴發生し、思はず筆多岐に走りて咎多し。

詩人ブローニング女史の故家

サマーセット女史手記

エリザベス、バーレット、ブローニングは〻じめて女性にて詩中に人生の秘訣を語りたる名媛なり。その作りしところは永く座を英國詞林のはじめに占めて女性の風雅これより百代の秀逸に入る。こゝろみに其詩を讀むときは誠や女性の手になりたるものとて優婉の妙味人の腸に入るのみならず、一種靈妙の氣その間に見え人をして一唱三嘆の外なからしむ。しばらく讀者とゝもに「レッドビユリーの」故家を探らばや。

今年はじめて「テトン」の連山に遊びしもの、歸りて是蓬萊の山なりけりといふ。「スイザーランド」はいざ、「ロンバルヂー」の大野に橫ふ欝欝の雲を疊めるも其心を飽かしむるに足らず、かれ幼きころ地圖のはじめを繙きて高山磅礴のごとく立並ぶを見しより、ことし「テトン」に遊びて其危峯森立の間に嘯きこゝに幼きころの想像を滿せしものなりけらし

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

げにや幼き心に思ひ定めし一筋の年を經てなか〳〵に消ゆべくもあらず何時か又こゝろに浮び出る折のあればや、人はこの經驗によりて其生れたる故山の風色を慕ふ。さればかの烏婆玉の闇の野に叫ぶ女の聲とて「ヘンホルドシャイア」に啼く杜鵑のゆかしければ、今その故山の舊家を記してエリザベス、バーレット、ブローニングのむかしを忍ばむこと同じ舊懷の情よりなり。

そも〳〵「マルバーン」の村に其名を得させし連山は高峯を最中として東の方に走り、むかし「ブリトン」が立籠りしといひ傳ふ古壘を以て枕としたり。その南北は亂脈かたちを定めず山色あやしき迄にさま〴〵の影を見す。こゝに「マルバーン、チェース」といふところありて麀鹿群をなし古槐瘦栗のたぐひ萬朶空を覆ふ。山上に立ちて見るときは西の方「サウス、ウエール」の深山高く雲の上に聳え、其他三方は遠くひらけて七國の平野びやう〳〵たり。そのあいだ「エストノア」といふところ二三里もあるべし丘陵波の如く起き伏し、小溪おのづから鳴泉を走らす。古樹蒼々として山風のおと寂しきあたり、女史の父こゝに「ホープ、エンド」といへる亭榭を搆へエリザベス、バーレット、ブローニングはまた其幼時をこのところに費したり。その風景を記したる女史の句に

"Green the land is where my daily
Steps in jocund childhood played.
Dimpled close with hill and valley
Dappled very close with shade—
Summer snow of apple blossom—
Running up from glade to glade."

この「エストノア」といへるは「レットビュリー」なる村に連りて、「レットビユリー」を右と見ば「エストノア」はまさに其左なる外山の空に鳴禽のあはれなるを聽くべし。こゝに世の市場の島嶼にも似て十六の丸柱より成れる古厦高く小山の端に聳え屋根は薄くして廣き石をもちい壁は白く塗りて日の光にかゞやき階砌結搆きはめてものしづかなるところ是をブローニングの「ホープ、エンド」とす。

エリザベス、バーレット、ブローニングが幼き頃の夢はこの山家の幽寂なる生涯のうちに閉されたり。げにや「自然」に對ひて人に勝れたる愛の眼を見ひらき絶代の奇句を吐くものは山國の人の遺傳とやいふべき。女史十五歳の春を迎へて、その優に感情性なる天禀の氣質は深く「エストノア」の「自然」の詩酒に醉ひしものゝ如く、そのころ既に妙なる詩句を

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

作りて後日天才の影もこゝにほの見えたりといふ。父はエリザベスの爲に讀者となり判者となりさまぐ\にして幼き女史が詩心の燃ゆるを導き、或は父子相携へて青葉のうらに風の音を聽き或は杏樹のもとに逍遙して暮れ行く春の色を惜み、そのあいだエリザベスをして其幼き想像に入り來る詩句をくりかへさしめぬ。さればこそ、の一寸の「インスピレーション」は後日千丈の奇想となり風騷壇上の世の人を驚かしたりけれ。エリザベスは人となりつねにかよわき方にして高尚なる神經質を帶び、骨は痩て昴く肉は落ちて纎く、眼大にして優に笑ふことまれにして悲哀の色をふくめり、一度渠を見しものはその淸婉温雅なる風采を忘るゝ能はずといふ。幼き頃はバーレット氏について學びしが後深く詩聖セークスピーアの旨を味ひ、更に「アチック」詩家の劇を學びてその悲曲喜曲に通じたり。

渠が生涯のさびしくして周圍のしづかなりしこと如何ばかり渠に讀書螢雪のおりを與へたりけむ、しかのみならず渠は身を重ずること深かりければ世の常の女子書を讀むこと百巻とせむに渠まさに千巻萬巻を破りしといへり。西暦千八百三十七年渠が同胞の物故りけるよりこれを悲みのもとゝして重き疾病の枕につきしが其より人の訪るゝを謝してしづかに衰へたるを養ふほどに忽ちその眼光を「無限」といふものにひらきて後日エリザベスの名をとゞむべき風雅のもとひをさぐりもとめし。

エリザベス、バーレットは「レットビユリー」の小村にて始てまのあたり失望零落の光景に接しそのおさなき心にも「人生」の不可思議なるにおもひを馳せたり。かの「マルバーンヒルス」の古寺に撞く鐘の音はしづかなる山村のうちに落ちて人の耳には息災とこそひゞきけめ、渠がおさなくさびしげなる心には如何に幽玄なるひゞきとは聽えけむ。

今より六十年のむかし世はいまだ貧富强弱相助くるといふことに篤からざりし。もとよりこれなかりしといふにはあらずたゞ其聲のかすかなりしが、爾儕たがひに愛すべしといへる新聲のいつしか世人の耳朶を貫きて「愛」のために一身を犧にせむとするもの雲の如く起りぬ。かのウエスレーの誠懐ひとたび九天の上を貫くや、英人はこれによりて始て大道の標準を得たるがごとく慈善の業は多くこれより出でたり。また

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

とに國の東西を問はず世の古今を論ぜずかの改革家といふべきもの世にすくなきためしなるが、そのころの心ある一人をエリサベスの父ブローニング氏とす。ブローニング氏は「レツドビユリー」にて遠近の老幼男女を會めこれら無識なる人々とゝもに語りともに謡りしが、ブローニング氏程の長者にして村民としたしげに手を握りしはいたく人の心を動かしたり、シエレーのいはゆる"The friend of unfriended poor."とはこれなるべし。土俗の人かたり傳へてブローニング氏の行く處にはかの愛らしくいとけなき姿のあらざりしことなくかの大くしてやさしげなる眼の見えざりしことなかりしといふ。蓋しエリザベスは常にその父の伴侶となりてともに諸方へおもむきたればなるべし。

この故に「レツドビユリー」はエリザベスが故郷といふべきのみならず、人を念ふが爲の受洗の靈場ともいふべきなり。渠は「エストノア」の古城におもむきて緑陰潭水のほとりに永き夏の日を消すことを好み、または湖上波しづかなるほとりに一葦を浮べて水禽とゝもに遊ぶを樂みとしたり。宜なるかな、渠が自ら愛友の名を記し下に幽懷の詩句を書きて家族の人々に贈りしもの今こゝの忘形見となりてこれを百代珍重の寶とはなせることと。

……………………

噫エリサベスは三十七歳に及びてブローニング氏に嫁ぎこれより故山「レツドビユリー」を後に見て伊太利に赴きしが、渠のかよわき天資として病魔の爲にうちをそはれ重き枕につきしことも幾度か。されどエリザベスは自ら病床に困みてかくて世の苦めるものを憐むの心を深うしたり。この心ありてこそエリザベス、バーレットは詩神を抱いて天地に泣くの人とはなりにけれ。渠わに徒に風月を鏤刻して風雅のうろたへものとなり畢らむや。

"Rise, woman, rise
To thy peculiar and best altitudes
Of doing good and of enduring ill,
Of comforting for ill, and teaching good,
And reconciling all that ill and good
Unto the patience of a constant hope:
Thy love
Shall chant itself its own beatitudes
After its own life-working. A child's kiss
Set on thy sighing lips shall make thee glad;
A poor man served by thee shall make thee rich;
A sick man helped by thee shall make thee strong;
Thou shalt be served thyself by every sense
Of service which thou renderest.

史傳

故辻夫人せん子の小傳

妾が久しく親愛して、はらからの姉とも思ひ慕ひし辻仙子姉は遂に先だち逝かれたり、姉が履歴につきては、書したくと思ひしが、恰も去月二十二日埋葬式執行の際、かれてより姉を知らるゝ近澤武雄氏が、其小傳を朗讀せられたれば、請ひ受けて歸りぬ、姉が詳細の經歷を記するは他日に讓りて、先づ此略傳を貴社に投ず、御揭載を賜はらば幸賀に甚し。

明治女學校内の一友人

辻夫人本性は高松氏文久三年十二月廿一日丹波の國氷上郡鴨坱村に生る父は彝母は伊久子幼名を道子と云ふ四歲にして母に別れ爾後祖母によりて養育せらる五歲のとき祖母に携へられて天王社に詣り途中多田川の橋より飛び落ちたり祖母驚怖措く能はず乃ち傍にありし十五歲の男子に救はんことを乞ふ男子乃ち脫衣水に投じて之を救ひ漸く助かるを得たり後其者の住所を尋ねしに竹林の番人なる仙吉と稱するものなりき則ち道子を救ひし者は仙吉なりしを以て之を忘れざらんがためにこれより改名してせん子と稱せり其後大坂に轉住す明治九年の春せん子十五歲にして神戶女學校に入學せり此年受洗キリストの敎會に加はれり仝年九月轉じて西京同志社に入りスタツク、ウエザー女敎師の下に學べり而して明治十五年六月に至りて邦語科を終へ翌十六年六月英語科を卒業せり而して實に八年間螢雪の苦を積めり仝年九月よりは尙同志社に留りて敎育に從事し勵み且勤て十九年六月に至りて職を辭せり

明治十九年九月九日はせん子が辻密太郎氏と結婚の大禮を舉げしの日なり是實にせん子が辻夫人としての新生涯の曉なり夫れより良人を助けて大坂島の內敎會に働く二十二年四月良人伊勢津市に轉任し八月せん子亦行て之を助け婦人會を組織して大に盡す所あり伊勢にあると殆んど二年此間二人の子女を舉ぐ廿四年七月良人上州に聘せらるゝに及び亦從て移り爾來亦良人を助けて忠實に働けり

明治二十五年三月十八日出產して男子を舉ぐ而して腦貧血症を起したために終に起つ能はず實に翌十九日午前七時二十分なり

以上は夫人が生涯の槪略に過ぎず吾人は尙大に夫人の裡面につきて觀察を要すと信するなり

夫人は性質剛直又溫和の風あり極めて耐忍に富み而して沈着或は幽鬱に過ぐる如きとあり又思慮深くして凡て理なくんば事を處せず其の故に夫人が同志社女學校創立の際よりして勉學の傍ら常に敎師の勞を助けて働らき明治十六、七、八年の此女學校最困至難の日に際して毅然其の衝に當りて屈せずよく西洋人と日本人との間を調和して實に學校の生命のために大に力を與へたり唯在校中の事のみならず是等の天賦の美性とその發揮はこれ即ち夫人が生涯の歷史なり或る人夫人を評して曰く「西洋人などの下にありて敎育せられし人の如くならず眞に沈着にして日本人の美質を發揮せりと」適評と謂ふべし又夫人が女子敎育に關する意見の如き頗る感ずべきものあり夫人は自ら日本夫人の位置を高尙ならしむるを以て己れの任なりと確信し嘗て女子國家に對するの義務なる論文中に論じて曰く……國家の盛衰興廢は敎育の普及道德の挽回風俗の矯正と否とによる而して敎育は家庭より始まり風俗は閨門より起る而して一家の政を主るものは婦人なり安ぞ國運の消長に關はりなしと云ふべけんや……これ夫人が女子敎育に對する意見にして又夫人が暫く女子敎育の難局に當りて辭せず務めて其發達と進步を計りし所以なり

又夫人は熱心傳道布敎のために盡くせり夫人が未だ校舍を去らざりし前キリスト敎果して本邦に益ある乎を論じて曰く日本の文明惜むらくは智識開發の一點に注目し道德養成の一點に怠り民心漸やく腐敗に傾斜するを如何せん此の時に當りてこれを回得し以て眞文明に歸せしむるは果してキリスト敎の力に超ゆるものなし……妾苟くも世の婦女子に先ち眞文明に至るの好路を得たるの一人なれば奮起興起日夜勉勵しキリスト敎の本邦に大益あるを保證せんとす……亦使徒パウロの爲人と題する文中パウロの溫柔寬容活潑豪邁實に君子廣海の量あるを述べ嗚呼キリストを信じ惡を棄て善に就き眞正の功名榮華を得んと欲するもの宜しく使徒パウロの來歷を熟視してそれこれに感奮するところあれよと又夫人が大坂にありし時の日記中に曰く今日は式祭日にて市街の往來織るが如く何方も商賣繁多に見受け

たり通行の婦女多くは身に美服をまとひ男子多くは酒色に耽り其心中實に思ひやられ主なるキリストの所謂嗚呼禍なる哉と嘆ぜられたるも唯ユダヤ人のみにあらずと大に感ずる處あり全智全能の神救主キリスト万國に福音の榮を顯はし早く我が同胞の民に爾の支配を及ぼし玉へと」思ふに罪惡なる此世界の不潔なる有様すべて夫人の眼目に觸るゝ所のもの多くは夫人の心に幾多の感情を與へしならん蓋し夫人が沈着豪活なる元氣を持ちその學校にありしの日より婦人のためにキリスト教主義の働きをなし終に其生涯を良人に許してその身を良人がさる所の傳道教會の事業を助くるために供へて永年一日の如くなりし所以のものは實にこれ等文章或は記事中に窺ひ得らるゝなり

又夫人は家庭にありて家事を統治整頓し柔和讓退にして節操の主義を重じ……一家の安寧平康を計るは則ち婦人の義務なりとし溫柔貞靜以て子女を愛育して善良の人物を作るは是れ上天父の洪恩に報じ下父母覆育の恩愛に酬ゆる所以なりとし良人に對しては貞實よく其心を慰め常に良人が採る所の事業のために十分に働くべきの餘地を與へて内顧の憂なからしめ子女に對しては溫厳愛撫し忠實恭儉以て家を齊ふに汲々たり夫人が未だ嫁せざりし時厳父殆んど一年他出して不在の事ありしが其際夫人が女學校の教授を擔任しつゝ父に代りて家政を斡旋しその困難の間に處してよくこれを調へ又貧困なる書生のために盡せり又家に在りて種々の事情のために來る所の憂苦は常に夫人の前后左右に迫るも自若として耐忍寛容よく家内の平和を計れり嗚呼これ等の技倆と精神は始終夫人の胸間に輝々として誠に家庭に於ける太陽なりしなり

吾人は尙終りに云はざるべからざるものあり即ち夫人の信仰これなり夫人沈着にして何事も表面に顯はるゝこと少なしと雖も内に熱して火の如きものはその厚き信仰なり思ふに前に述べし夫人の麗はしき性質とその發輝とは誠に熱信の泉より流出したる滔々たる河水なりしならんその故に平生人に告げて未來にいたるべき準備を語り或は生涯主のために働きて主に對する義務を終らざるべからざるを語れり又夫人が在校中の文章の如き殆んど神の恩を謝し又はキリストに對して盡すべき等の句あらざるはなし以て夫人が平生信ずるところを察するに足らん尙ほ其臨終に際しては吾儕深く感ずべきこと多し明治廿五年三月十九日朝病革まり遂に起つ能はざるとを知るや良人に向て最早天に往くべきの時至れるを告げ二三人の祈禱を求め自分亦「神よわれを取り去り玉へと」祈り側にありしものに告別し尙教會員に傳言を賴みて厚誼を謝し遺言すべきとありやと問へば何事もなしと答へ遂に新撰讃美歌第四十七番を撰みてエホバはわれをこふ者なれば……を唱へ良人の顏をうち守りその手を握りて溘然不歸の永き旅路に入りしものは常に動かすべからざる確信あるものにあらずんば何ぞかくの如くならんや

其他夫人は和歌を詠じ文を綴るとを好めり明治廿年病にかゝりしときの如きも詠歌によりて靜かに心を養へり而して夫人の和歌は「淺瀨の波」其他の内に輯められたるものなり又女學校にありしときの文章并に卒業論皆今日に存せり殊に卒業論文は大に見るべきものなり又去る明治廿三年帝國議會の開會を祝する文及び和歌も今尙良人の手に存せり

嗚呼夫人の爲人につきては何ぞ此の一小文の中に盡すとを得んや余輩の觀察する所は唯その一小部分に過ぎざるなり若しそれ夫人と共に校舍に學びし友或は夫人に親炙して共に交りし人に至りては益々余輩の云ふ能はざる所に極めて緻密の觀察あると信ずるなり

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

小説

黑頭巾

第三回

十八公子譯

説教。終りを告げしかば、つどへる人〻はわれさきに推し合ひて急ぎ立ち出でぬ。心の裏に壓しころし居たる驚訝の念を互みにかたり替さん爲めに。かの黑覆巾の見えずなりしや否、精神何となう重荷を卸せしやうに覺えしが爲めに。

かくて、四人五人、輪をなして打つどひ、口の中にてかにかくと囁やくもあれば。心にふかく思ふよしやありけん、一言をも得はかで、ひとり家路を辿るもあり。さては聲高にうち語らひ、誇りがに笑らひさゞめきて、あたら聖日を穢す輩もありけり。あるはこの不可思識を見透したらんやうに、怜悧しげに頭打ふり。あるはまた、こはつゆあきしき仔細のあるべくもあらず、たゞフーパー氏は直夜中まで燈の光明に眼をさらせしために、いたく視力を損ひたりしかば、日光を恐るゝなれといひ張るもありき。暫時たちてフーパー氏も群集の後につきて歸り來りしが、かの覆巾つけたる面を彼方こなたにむけつゝも頭に霜をいたゞける人〻には、いと慇懃に尊敬の意を表し、中年の人〻には己をば、彼等が朋友とも神靈上の案内者ともなして、一種の威嚴をもて禮をほどこし。小年の輩には威嚴、愛情うちこめて會釋なし。幼けなき小兒等には祝福をいのりつゝ彼等が美しき頭を撫でゝ行き過ぎぬ。かゝることは安息日毎に例となしたることなりしかど、人〻はたゞ怪訝と驚惶の色をもて彼が禮をかへせしのみ。誰れ一人、さきの日の如く彼等が牧師と打つれだちて、家路に歸らん榮譽を得まほしと願ふはあらざりき。大方の安息日にはかならず晝餐を共にせしサウンダア翁すら、不意の混雜に打忘れたりけむ。今日のみは招かんともせざりしかば、牧師は直ちに我家にかへりて門の戸を鎖さんとする折しも、牧師は、己が方に眼を注ぎ居し人〻を見かへりぬ。悲愁を含める微笑はかすかに黑覆巾よりもれすき、口邊の打搖ふも朧げに知られたりしが、忽ち姿は見えずなりぬ。

午後の集會も同じさまにて闋りぬ。説教のやうやくはてし折、號鐘は若き小女の葬式のためにとて撞き出されぬ。親戚、朋友等は會堂の中に打つどひ、さまで親しからぬ向は戸外に

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

立ちて、亡せにし小女を賞へ居たりしが、忽ち口を箝みたり。と見ればフーパー氏の姿彼等が前にあらはれたりしが、その面はなほ黒覆巾にて掩はれぬ。ア、黒覆巾こそ今ははやこの人になくてかなはぬ徽號となりしなれ。牧師は屍骸を安きたる室に進み行きて、この亡せにし信者の最後の告別をなさんとて棺の前に立ちよりぬ。立ちよりて身を屈めたる折しもあれ、黒覆巾は彼が額のあたりより落かゝりしかば、若しこの亡せにし少女が睫たに長へに閉ぢられざりしならんには、少女のみは彼が面を見たりしならん。フーパー氏は彼女に見られんとの恐ろしくてや、周章てふためきて黒覆巾をしかと結びぬ。されば今はこの幽明境を殊にしたる二人が有様を窺ひみたる人は、牧師が面のあらはれし其刹那には、彼の少女はその面こそ亡せにし人につゆ違はざれ、そが經帷など頭にはたゞれたる綿布の帽子はサラ〳〵と擦れ合ふ音して、死骸はたしかにゆらぎたりといひ張りぬ。されど是が證人となりて一向にいひつのるはたゞ迷信深き一人の老嫗のみ。

フーパー氏は棺をはなれて、喪主が室に入り、さて葬式の祈禱をさゝげんとて講壇の上にたち上りぬ。一塲の祈禱は悲哀に滿ちて人々の心も消え去らんばかりなりしかど、尚悲んで傷るに至らず。天國の希望は語句の裏に磅礴として、かつて棺の中なるその人が纎指にて奏でたる天上の音樂かとも怪しまるゝ竪琴の聲の、いとかすかに、牧師が腸をたゝんずる一抑一揚の語の中に聞ゆるやうに思はれぬ。それのみかは、牧師みづからもこゝにつどひる人〳〵もはた此の世に生きとし生けるもの、たれかはこの弱き少女の如くならでやむべき。己らが頭を掩ふたる覆巾もにはかに奪ひ去らるゝ時あるべきに、おの〳〵その準備せでやはとの祈禱の語をきゝし時は、その意味は朧氣に知らるゝのみなりしかど、並み居る人々覺えず身をふるはしぬ。柩夫まづ立ち出れば喪主つゞきて外の方に出で來り、棺を先に立てつ。通りすぐる街々をうち濕めらしてねり行くその行列のいとも後に、フーパー氏は黒覆巾をつけつゝつき來りぬ。

孤兒の友臨時報告

曩に豫告せし通り、孤女學院の新築は、彌々今般落成せり。然して同院は本月九日、新築の校舍へ引移られたり、其所は左の通り

東京市北豐島郡王子瀧の川村　孤女學院

女報

可愛子編

●恩賜金三千圓　去る十日、府下神田、日本橋區內火災に付き、聖上、皇后兩陛下より、思召を以金三千圓を下し賜はり、目下救助補助費に充べき旨、去る十一日東京府へ廻達ありたりといふ。

●產婆の篤志　麴町區一番町十八番地の產婆長島さき子は、神田大火の罹災者へ救恤金を出したるが上、尙ほ貧困者の姙婦にて臨月の者は、此際無謝義にて手術取扱をなす旨を、各所へ張出したりと云。

●和蘭國公使の義捐　羅馬府駐劄和蘭國公使フオン井ステムベルダ氏より、愛岐兩縣に於ける震災被害者救恤として、五百馬克(此金百六拾四圓二拾錢)を惠與せられ、在獨名譽領事カール、ツオルフソン氏の手を經て日本赤十字社に寄托ありたり其厚志最も喜ぶ可し、仍て同社は先に同氏より寄托ありし金額と併て、シーボルト氏募集の回金到着を待ち、兩縣廳に照會し、分配法其宜を得て、義捐者の意を滿足せしむる所あらんとす。

●福田會育兒院　昨年は畏くも　皇后陛下の行啓あらせられ、親く孤兒を見そなはせ玉ひ、爾來年金の下賜を忝なうせる福田會育兒院に於ては、近頃惠愛部てふものを置き、會員中の貴婦人方が月番にて幼兒を撫育せらるゝ由、又患兒は專ら順天堂醫院に於て施療せられ、佐藤同院長には始終往診せらるゝと云へり、今昨廿四年度の施療を聞くに、患者三十三人(内全治廿七人、死亡五人)治療日數二千百四十三日、此の藥價百四十六圓廿五錢なりしと。

●東京府高等女學校　同校にては、女生卒業の上は尙三ヶ月間特業生として修業せし上は、高等訓導免狀を下附し來りたるが、此度同規則に改正し、六ヶ月間に延期し、有益なる學科を加へ教授し、而して特業生なるものは、平素一學科に付五十點以上得點あるものならでは許可せざる事になりしと云ふが、右は同校生徒の不服あるを以て斯はせしものなりと。

●嬉しき物　明治女學校の生徒本所の養育院を訪ひ、窮民孤兒を賑はり若干の金を寄附して去る、近來女風頽廢を說く者多し、而して今や此擧あり、正に是れ烟月朦朧の夕、雲を破つて一聲の杜鵑を聞くの意。(東京日々新聞)。

●小藪女史　巾幗藩家中の錚々たるもの、今や奮然造化の精英を發揮し之を閉籠會に出して、碧眼を驚殺せんとす、可謂藝苑之女丈夫焉。(東京日々新聞)。

●畠山勇子の紀念碑　昨年湖南事變の際、京都府廳門前に於て自害したる畠山勇子の爲め、谷鐵臣、吉田默等の諸氏發起となり、紀念碑を建立し、來る二十一日より三日間、其の墳墓地なる末慶寺に於て建碑式を擧行する由。

●警察の注意を喚ぶ　何物の惡漢か黌の中央番町及牛込邊に出沒して、十字街頭に妙齡の婦女を見掛るや、其の面部を創傷し逃し去る、爲に奇禍に罹りし者、數十人の多きに及ぶ、而して警官の其一人を追捕したる者あるを聞かず。先年倫敦府に夜中屢々賣淫女を虐殺して忌憚なき者ありしも、警官の遂に之れを捕ふること能はざりしが爲め、時の警視總監は其責を引き、其職を辭したるにあらずや。而して我國に在ては彼れ英國に於けるが如く且に人を倫敦に殺したる者忽ち遁逃して夕に大陸に在るが如き事情あるにあらず、然るに我が警察の兇漢一名をだも捕ふると能はざるは何故ぞ、我國生平警察の周到を誇る而して事實此の如し、吾儕は敢て警視總監の注意を喚ばざるを得ず。(國會社說)。

●吉原細見の買入請求　何れの官省かは知らざれども、昨年度の書籍購入費に若干の餘裕を生じたれば、是非之を消費せばやとて、書籍の購入を要するものあれば至急其書名を報告ありたき旨、圖書掛りより各局課に照會したるに、或局員は吉原細見錄一部を請求せしより掛員は之を局長に、問合せしに全たく自己の快樂に供するものなること判然し、局長より嚴しく御眼玉を頂戴したりとか聞く。(都新聞)。

●吉原の櫻　植附の事、一たび願出却下せられて、醜業者再び之を願ひ出づ、而して再び聞屆け難しの指令下る、快何ぞ堪へん。

●婦人會の開會　去る九日茨城縣下の同會は、月次會を弘道館に開き、來會者廿余名にして同市開業醫林魁介氏は、婦人に有益なる談話をなし、終て會員一同へ茶菓を喫し、散會せしは午後四時過る頃なりしと云ふ。

●風俗の取締、俳優の恐慌　大坂警察部にては、過般來一層風俗上の取締に留置し、各警察署に風俗掛を置き、已に藝妓取締規則を發布して町藝妓の弊風を除却し、又中村鴈次郎、野澤吉兵衛の如き賭博犯にて處刑せらるゝに至りたるが、此際俳優社會にも手を着け、其弊害を矯正せんため俳優取締規則を設け、不品行の者並びに前科あるものは營業を許さず、已に許しある者は之を停止し、又客人の招きに應じ、芝居茶屋、料理屋、宿屋等に至るを禁じ、寫眞を他人に與へ或は賣却する事を禁じ、尙他人より謂れなく金品を貰ひ受る事、及び身分よりも贅其他の景物を客人に贈る事を禁止し、又乘込は衆人の目に着かざるやうする等、凡五ヶ條七項目のものを製定し近日發布する都合にて、いよ〳〵實施の曉には鴈次郎等

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

の如きは無論俳優たるを得ざるべしと。(都新聞)。

●兵庫縣會　議員五名兵庫民報を相手取りて誹議の告訴を起せり、其事歌妓を云々せしと記載したるに因る、事の有無は知らず、斯る醜聞の世に傳播するを厭ふ。(東京日々新聞)。

●藝妓追込の建議　近頃廢娼說と隨伴するものは藝妓の取締論なり、兵庫縣會にては町內各所に散在せる藝妓を一切遊廓內に追込められんとを建議せしに、大坂にても同樣の議論起り、又た中國の某縣にては同樣の建議を爲せしも却下せられたるを憤り、縣立學校の四面へ藝者屋を設けて當局者を懲らさんとする不心得ものもありといふ。(自由之鐸)。

●三重縣通信　◎元來宇治山田町は大廟の有る處なるに、妓樓殊に多く、古市と云ひ河崎と云ひ其數殆むど二百戶に及ぶ、是れ誠に同地の神聖を汚すこと甚だしければ、宜しく妓樓を全廢する乎、或は市街外に移轉せしむべしとは、國家小中村義象氏が山田に遊びしとき慨歎せられし言なり、嗟呼誰か心ある者之を憂へざるものあらむや、此頃宇治山田町の基教徒諸氏、慨然として廢娼論を唱へ大に之を江湖に訴へむとす、其趣旨及び方法は少しく他の廢娼論者の言ふ所と異なるのみならず、進むで藝妓をも廢せむとするにあり、即ち先づ宇治山田町の惡業者に相談して藝娼妓の鑑札を返上せしめむとするにあり、今其趣旨を聞くに、惡業者は、藝妓の收入を四分六或は七三とかの分割となして、自ら其六分或は七分を引き去るにも拘らず、所謂前借として貸與したる金員には、成規の利子を付して僅かに四分或は三分の入額より引き去るの例なれば、容易に前借を濟まして正天地に戾ること能はず、十七八歲より三十歲に至るまで、空く悲痛なる歲月を送らざるを得ざるは實に憐むに堪えたり、故に此等の不正なる計算を改めて、更に正當なる計算をなし、前借金の滿ちたるものには盡く鑑札を返上せしめ、若し惡業者にして之に應ずることを拒めば、決然其筋に上伸し、又一方には天下の義人を訴へむとするなりといふ、此事に就ては、二三の惡業者も同意するに至りたりとか。

◎松坂佛教婦人會　飯高郡松坂町の同會は、去る四月四日より三日間同地正圓寺に列會を開き、小櫻諦善氏を招聘して法話を聽きたるよし。

◎桑名女紅塲　桑名郡桑名町女紅塲には、いぬる十五日より一週間試驗を行ひしに、受驗生徒は百五十五名にして內三十五名優等なりし、依て去る二十八日履行修書授與式を行ひ、又奬勵の爲め種々の物品を與へたりしとぞ、過を改むるに憚ること勿れ、余輩は藝娼妓が字を知り書を讀み、道理のあるを悟りて、一日も早く前非を悔ひ正業に就かむことを希望するや切なり。

◎三重私立女學校第三回卒業式　三重私立女學校にては去る六日を以て第三回の卒業免狀授與の式を執行せり、來賓には三重婦人會員、振起會員、其他官吏、新聞記者等、二十余名なりしといふ。卒業者は、本科にて、(河合りき子、瀨木ちか子、佐治いちの子、佐伯うめ子、稻垣さよ子、鈴木すま子、草川よし子、西田いく子)の八女史にて、撰科にては、(浦とう子の)一名なりしとぞ。

●西京通信　◎京都府下にて高等師範校に入學女生は、關口志づ子、中西てつ子の二氏なり。

◎師範校新入生の試撿成績中、女生は裁縫、習字科長所にて、地理、歷史、圖畫は短處なりし由。

◎師範校にて、幼稚園保姆傳習規則を設て募集せり、身躰健全、品行方正、年齡十七年以上、高等小學卒業以上の學力、期限は一年間、學科は倫理、教育、國語、算術等九科なり。

●福井縣通信　◎工女賃金　本縣下の羽二重織は、年一年より其製造額を增し、昨年は一日平均の製造高二百七十九疋なりしに、今年は日々の平均高六百疋に及び、其一日の女工賃金は四百五十圓の平均にて一ヶ月金壹万三千五十圓、一ヶ年は實に拾六万二千圓の巨額に上る由。

◎女子の職業　前記の如く羽二重織の盛大なるに付、女工の拂底を告げ、女子の職業としては隨分高價の工賃を得るに付、密賣淫の醜業を爲すもの大に減少し、柳陰佇立人を招くの醜躰は、市中先づ地を拂ふの有樣なるのみならず、十年內外の少女も、夫々使雇の途あるを以て、街頭に徘徊して戲を爲すの少女も尠く、兎も角結搆の事と云ふべし。

◎高等女學校　本縣の師範學校女子部は、一昨年廢止して中學校女子部に合併せしが、本年四月一日より更に特立して高等女學校なるものを設立し、其經費は縣稅より支辨せり、又本縣參事官加藤寬六郞氏は高等女學校長兼務を、本縣師範學校教諭若杉八百太郞氏は高等女學校教諭兼務を、師範學校教諭小林貫藏氏は高等女學校助教諭兼務を、勝山千百里氏は高等女學校書記兼教諭心得(月俸十八圓)、三國芳太郞氏は高等女學校教員心得(月俸二十圓)、里村なみ子(月俸二十圓)、田川あい子(月俸十圓)島田豐氏(月俸七圓)は、何れも高等女學校教員心得を命せられたり。

◎僧侶の腐敗　本縣下は有名なる佛教地にして、殊に佛教中眞宗の隆盛なる土地にて、京都兩本願寺の金庫とも稱すべき所なるが、從て眞宗僧侶の醜行は殆ど見るに忍びざるものあり、其細君にも憚らず公然妾宅を搆え、七八日乃至十日余も說教に巡錫せば、二三日は錫を妾宅に滑め、鬱散しと唱へ、且つ耽淫沈醉の醜躰を暴露して自ら耻ぢざるのみならず、其信徒も亦敢て怪まず、余輩は寧悲哀に耐へざるなり。

●露國皇后皇太子の遭難　去る三月上旬、露國、皇后、皇太子が馬車同乘にて、セントピータースボルグの市中を通行さるゝ折柄、傍らより何とも知れぬ怪しき一箇の包み物を車內目掛けて投げ込みしものあり、幸にして車へは當らず外れて積雪の中に落ちたれども、只事ならず見えければ、御者は疾驅して還啓を急ぎ、警察官は罪人捕縛に奔走したり、左れども投付けたる本人は逸早く群集の中に紛ぎれて見當らず、嫌疑を受けて拘留されたるもの數人あり、右の包み物は水物を入れ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

たる器の上を織物の切れにて包み、未だ何物とも知れざれど多分爆裂彈ならんと云ふ。

●獨逸皇后陛下の御模樣　獨逸皇后陛下には近頃わけて謹愼に在はさるゝより、宮中の噂さりしくなり陛下は笑ませらるゝとさへいと稀にして、始終宗教のとのみ御物語あり、殊に市中貧民を救助すべき慈悲事業の必要を口癖にし玉ふ、されば小說御覽もなされず、唯ゞ傍近く召仕はるゝ宮女に向て、われと同じく振舞ふべき旨仰らるゝのみ、一日中二三時間は宮中の牧師、殊にドクトル、コーゲルと御對話あり、果てゝ後、寢殿入御、祈禱の上、落涙に沈ませらるゝと屢々なりと申す、あるものは陛下は近頃迷信者となり玉ひたり、宗教に惑溺され玉ひたりなど噂す、されど一般の風聞によれば、畢竟、宮闈なんとなく面白からざるにありと申す、そを如何にと云へば、皇帝陛下は此頃耳疾を惱ませ玉ひ、とかく震怒あらせらるゝより、時には二三日皇后陛下へ御聲さへ掛け玉はずして、唯、皇子等を相手にその責任を說き聞かせらるゝのみなりなど申す。

●ヴァイチラエーグリスチールド孃　今回ノルスウヱストルン大學製藥科卒業生四十八名の中同孃は只一人の婦人にして若かも最上の位置を占め大學の紀念賞牌を授與せられたりと云。

●万國博覽會委員　カニチカット州よりは十六人の男子と同じく十六人の女子を同委員として推撰せりと云ふ。

●支那帝國皇后陛下　には美術品製造と云ふとの婦女子に尤も適切なるとを甚く感賞せられ數月前北京宮殿地內に絹機場を設けて爰に仕事ふき婦女子をして職を取らしめんと企て玉ひしが廳廷は之を許容せず爲に他に直接陛下の御監督を受け易き處を撰み建設する事に決せりと云ふ。

●盲啞院兒女等が美學　サウスボストンなるペルキンス盲啞學校の兒女等はジャマイカプレーンなる幼稚園補助の爲め去る二月二十二日に於て展覽會を催しぬ。即出所に於ては先づ第一に新式軆操ありて女子等が種々の贈與ありき、午後には男兒等が會も終りて後監督アメグノス氏は非常なる熱心もて幼稚園を完全に進めんが爲に要する資金募集の必要を辨舌誘導せられぬ。エデストマス、ヘレンケルラー、リットルウヰリーロゼン、ベビートミー其他多くの盲啞兒女等と出席し大に人心を感動せしめたりと云ふ。

●婦人懸賞文　ボストン大學にて其が卒業生に發したる四種の問題中三箇婦人其賞を受けぬと。即英國文學及生活上ウイリアムカックストン氏發明の印刷器が如何なる勢力ありやと云へるに對し第一賞は千八百九十一年ドルチエストル大學卒業生ルスパルーウイトモーア孃にして四十弗を得第二賞は千八百九十年ラテン學校生ウイルソンウチルメル氏にして二十弗を得られぬ。又マーコホロの觀察幷に其がコロンボスに於ける勢力と云へるに七千八百九十一年ドルチェストル卒業生ヘレンマルゲソン孃第一等にして次は同年女大學卒業生エセルデーミユード氏なりきと、此くして十三通の答案は此時尤も見るべきものなりきと云ふ。

品名	四月十四日
白米（一円ニ付）	
一等米	一斗〇升〇合
二等米	一〇二
三等米	一〇五
四等米	一〇八
五等米	一一五
正米（一円ニ付）	
越中米	一斗四升四合
尾張米	一三五
美濃米	一四〇
南部米	一五〇
一志米	一三九
雜穀（一円ニ付）	
本貫大麥	二斗八升五合
上州小麥	一七五
竹林麥	一九五
梅澤大豆	一九五
青柳大豆	一九五
吟小豆	一六二
白胡麻	一一八
黑胡麻	一四五
鹽（一円ニ付）	
赤穗	三、三〇俵
大鹽	三、四〇
本齋	五、五五
新齋	六、〇〇
醬油（一円ニ付）	
最上	
極上	
上物	
中物	
並物	
	樽 七分四厘　七九　八七　一、一〇　一、三〇　一、六〇　一、八〇　二、〇〇　二、一〇　二、七〇
味噌（一円ニ付）	
地製上白	七貫、〇〇〇
同上赤	七、〇〇〇
同紅赤	四、三〇〇

品名	四月十四日
眞綿（一個ニ付）	
上々入金	一一三、五〇円
上入金	一〇七、〇〇
並入金	一〇二、〇〇
松入金	八八、〇〇
竹入金	八三、〇〇
梅入金	七五、〇〇
絹糸（一円ニ付）	
本練花色	二七〇匁
同色物	二五〇
羽二重糸	二四〇
延糸太筋	三三〇
芥子糸色物	二九五
同薄色	二四〇
極天色物	二三五
色物太練	二五五
紡績糸	四五〇
濱縮緬	
大巾上馴	四、八〇円
小巾百廿目立	五、三〇
同並物	五、〇〇
花色絹（一円ニ付）	
七十目附	二六〇匁
八十目附	二七〇
九十目附	二七〇
百目附	二七〇
同小節絹	
八十目附	四三〇匁
同本秩父絹	
百四十匁附	四八〇匁
白木綿（一円ニ付）	
玉鶴	三反、四五
綾鶴	三、七五
日の出鶴	四、〇五
若柳	三、二五
蓬萊	四、一〇

品名	四月十四日
製茶（一貫目ニ付）	
山城江州稀大頭	二、五五円
同稀頭	二、一〇
同大頭	一、七七
同中頭	一、五五
同中茶	一、三〇
狹山稀大頭	二、〇〇
同稀頭	一、七五
同大頭	一、五〇
同中頭	一、四〇
同中茶	一、一〇
乾海苔（百枚ニ付）	
洲崎	七五錢
大森	七五
深川村	七五
大師河原	六〇
潮田	五〇
鰹節（十貫目ニ付）	
土佐夏	二八、五〇円
薩摩夏	二三、五〇
伊豆夏	二九、〇〇
駿遠夏	二六、〇〇
房總夏	二三、〇〇
銚子夏	一七、五〇
水油（一樽ニ付）	
地水	六、五〇円
胡麻	一〇、五〇
荏油	一〇、三〇
桐油	六、一〇
冬	七、四七
坂水	七、五〇
石油（一箱ニ付）	
チヤスター	……
デボース	……
ホーキ	一、六八円
ロシヤ	一、六五

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

「女學生」大に變化一進して小學女生諸君の上にも友たらんとす

一春風吹き來りて百花爛熳たらんとするの候、女學生大に千紫万紅の裝ひを一進せずんばあらず、

一同盟せる高等女學校の秀才、筆大に熟して一層小學女生の上にも博く友たらんとす、

一故に面白き趣向をも加えたり、即ち、野邊の遊び博物の園、秘藏箱、文學時事、家の友、理科の話し、詩歌の卷、古文庫、小說、餘興、等の欄を增したり、

一別に「文の林」欄を設けて廣く小學校女生徒の文章をも掲げんとするが故此等の投書をも募るものなり、

一代價も、追々愛讀者增加するを以て一層奮發する所あり、即ち四錢に改めたり、

一改まりて出づる廿三號は來る廿一日を以て發兌す、

女學雜誌社女學生部

交詢案内

十三才より大阪表にて和服專門の敎師に就き多年修業、其後高等女學校手藝科全科三年まで修業し、和服裁縫には隨分巧みなる高橋ふく子(年齡二十八年三月)といへる方あり、東京市内にて私立學校或は大家の和服敎師を望めり、御依賴の方は、神田小川町四十一番地市川惣太郎方寄留同氏へ御尋ねあるべし。

女學生徒募集

常學期試驗來月初旬に終り、各級に入學生を募集す、有志の者は四月中に申込まるべし、當校設置の各科左の如し(但し規則書は郵劵二錢を贈らるれば速かに贈呈すべし)

○高等科(高等の敎育を望む者の爲めに二ヶ年卒業の仕組にて設く)
○師範科(女敎師志願者の爲めに設く)
○普通科(高等小學卒業者は無試驗にて幼年級に編入す)
○幼年科(高等小學以下の程度に應じ專ら幼稚者の爲に設く)
○專修科(英學、漢學、和學、繪學、音樂、女禮、裁縫、速記等專修志願者の爲めに設く)

麴町區下六番町六番地

明治女學校

●●女學雜誌賣物廣告●●

第二百五十一號より第三百號迄五拾冊相揃

右ハ五拾冊相揃六拾卷丈別段本社ニ備付有之候處、第一號より續々御註文に付今回特別代價引下五十冊一時に御買取の分は郵稅共金壹圓にて御求めに可應候部數に限り有之候間至急御申込に相成度候也

右五十冊中の重なる記事は(社說)●吾黨の改革事業 ○山中獨語 ○天災地震 ○敎育者の快樂 ○日本の基督敎 ○殖民論 ○婚姻論(見鑑)小公子(小說)浮雲胸 ○紫瀾の嵐 ○流れの葦 ○今はむかし ○無想劍 ○腹中の蛇 ○枯尾花(文學)花月の遊 ○文學上の德義 ○ミルトンの詩 ○至誠と詩歌 ○女性文學史

女學雜誌社出版部

廣告定價

一特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する毎に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分毎に十部增の割合と定む

一行(廿七字詰)一回 前金拾錢
同 三回以上 一割引
同 六回以上 二割引

十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絶す慈善上の事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

日本評論

第四十一號 三月廿五日發行

定價一冊六錢○六冊三十錢○十二冊六十四錢○市外は一冊に付郵税五厘を要す

◎日本評論

人生の歸趣……植村正久

改革家、策士及び文學家……以太利の傑マッジニー

「ハッケチ」縫ひ……百合園主人

加特力教的社會主義

人類と政治……以太利國リチイ

◎理科新報

佛國學會の數○英米の鐵産○定星閒光の速度○電氣の波の速度○滊船と大鯨の衝突○科學獎勵會○ロマンース演說會

◎雜錄

日本の思想と西洋の思想○因循固息といへる四字の盛衰○出埃及記を讀む○日本帝國改造の順序

發行所 麹町區三番町 日本評論社

第四版 **百人一首講義**

鈴木弘恭大人講述 附錄小倉てびき

定價金廿八錢 郵税四錢

新年に至り注文いよ／＼多く第三版品切に成りたれば茲に第四版を印行し、且つ「小倉てびき」と云ふ、極めて便利の見出を添ゆ、之によりて、百人一首それ／＼の歌の句の在り處、意味、よみ手などを直ちに見出すことを得る至極重寶の案內書なり。

大取次 敬文堂 六番町六番地 女學雜誌社

黨報

毎月二回 十日廿五日

第十號目次 (四月十日發行)

○黨論

◎廿五年度豫算案は再び議會に提出せざるべからず……栗原亮一

○黨報

◎自由黨臨時大會◎我黨代議士綜會◎政務局調査委員◎我黨は之を爲さす◎加盟◎代議士宿所

○論說

◎豫戒令に對する疑問……蒲生仙

◎辨妄……駒林廣運

◎自責自戒論

◎內閣大臣は社會進化の原則に從て進退す可し……加藤平四郎

◎封議會策と陸奥宗光氏の擧動……牧野照 小久保喜七

○時事

◎條約問題◎超然國の大臣◎伊藤伯◎飛檄◎希有の物躰◎貴族院◎海關稅◎論理の勝利◎炭礦鐵道會社◎渡邊北海道長官◎新任社長◎莫設恨風雨◎廉士◎政府委員◎選擧と法官◎民黨の旗幟◎劈頭第一の問題◎非藩閥黨◎中立議員◎關東會と關西會◎理想の亡國◎我黨の魂魄◎改進黨の新綱領◎吏黨◎無恥◎深入◎條約改正の時機◎條約改正委員◎朝鮮國防穀事件◎非地價修正派◎高知縣第二區の當選訴訟◎奇怪◎開會の準備◎千七百年代の英國◎勢を利導せよ◎時事日記◎除名

東京芝公園內 **自由黨黨報局**

發行所 東京市麹町區下六番町六番地 **女學雜誌社**

編輯兼發行人 巖本善治

印刷人 堀口庄三

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

日本評論

三月廿五日發行

定價一冊六錢〇六冊三十三錢〇十二冊六十四錢〇市外は一冊に付郵稅五厘を要す

◎日本評論
人生の歸趣……植村正久
改革家、策士及び文章家……以太利の俊傑マッジニー
「ハンケチ」縫ひ……百合園主人
加特力敎的社會主義
人類と改治……以太利國リチイ
◎理科新報
佛國學會の數〇英米の鐵產〇定星間光の速度〇電氣の波の速度〇瀛船と大鯨の衝突〇科學獎勵會〇ロマンース演說會
◎雜錄
日本の思想と西洋の思想〇因循固息といへる四字の盛衰〇出埃及記を讀む〇日本帝國改造の順序

發行所　麴町區三番町　日本評論社

第四版 百人一首講義

鈴木弘恭大人講述　附錄小倉てびき

定價金廿八錢
郵稅四錢

新年に至り注文いよ〳〵多く第三版品切に成りたれば玆に第四版を印行し、且つ和小倉てびき」と云ふ、極めて便利の見出を添ゆ、之によりて、百八一首それ〴〵の歌の句の在り處、意味、よみ手などを直ちに見出すとを得る至極重寶の案內書あり。

大取次敬文堂　六番町六番地　女學雜誌社

黨報

每月二回　十日　廿五日

◯黨論

◉廿五年度豫算案は再ひ議會に提出せざるべからず……栗原亮一

◯黨報

◉自由黨臨時大會◉我黨代議士綜會◉政務局調査委員◉我黨は之を爲さす◉加盟◉代議士宿所

◯論說

◉豫戒令に對する疑問……蒲生仙
◉辨妄……駒林廣運
◉自責自戒論……加藤平四郞
◉內閣大臣は社會進化の原則に從て進退す可し……牧野照
◉封議會策と陸奧宗光氏の擧動……小久保喜七

◯時事

◉條約問題◉超然國の大臣◉伊藤伯◉飛機◉希有の物躰◉貴族院◉海關稅◉論理の勝利◉炭礦鐵道會社◉渡邊北海道長官◉新任社長◉莫設恨風雨◉廉士◉政府委員◉選擧と法官◉民黨の旗幟◉劈頭第一の問題◉非藩閥黨◉中立議員◉關東會と關西會◉理想の亡國◉我黨の魂魄◉改進黨の新綱領◉吏黨◉無恥◉深入◉條約改正の時機◉條約改正委員◉朝鮮國防穀事件◉非地價修正派◉高知縣第二區の當選訟訴◉奇―怪◉開會の準備◉千七百年代の英國◉勢を利導せよ◉時事日記◉除名

東京芝公園內　自由黨黨報局

東京市麴町區下六番町六番地
發行所　女學雜誌社
編輯兼發行人　巖本善治
印刷人　堀口庄三

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY